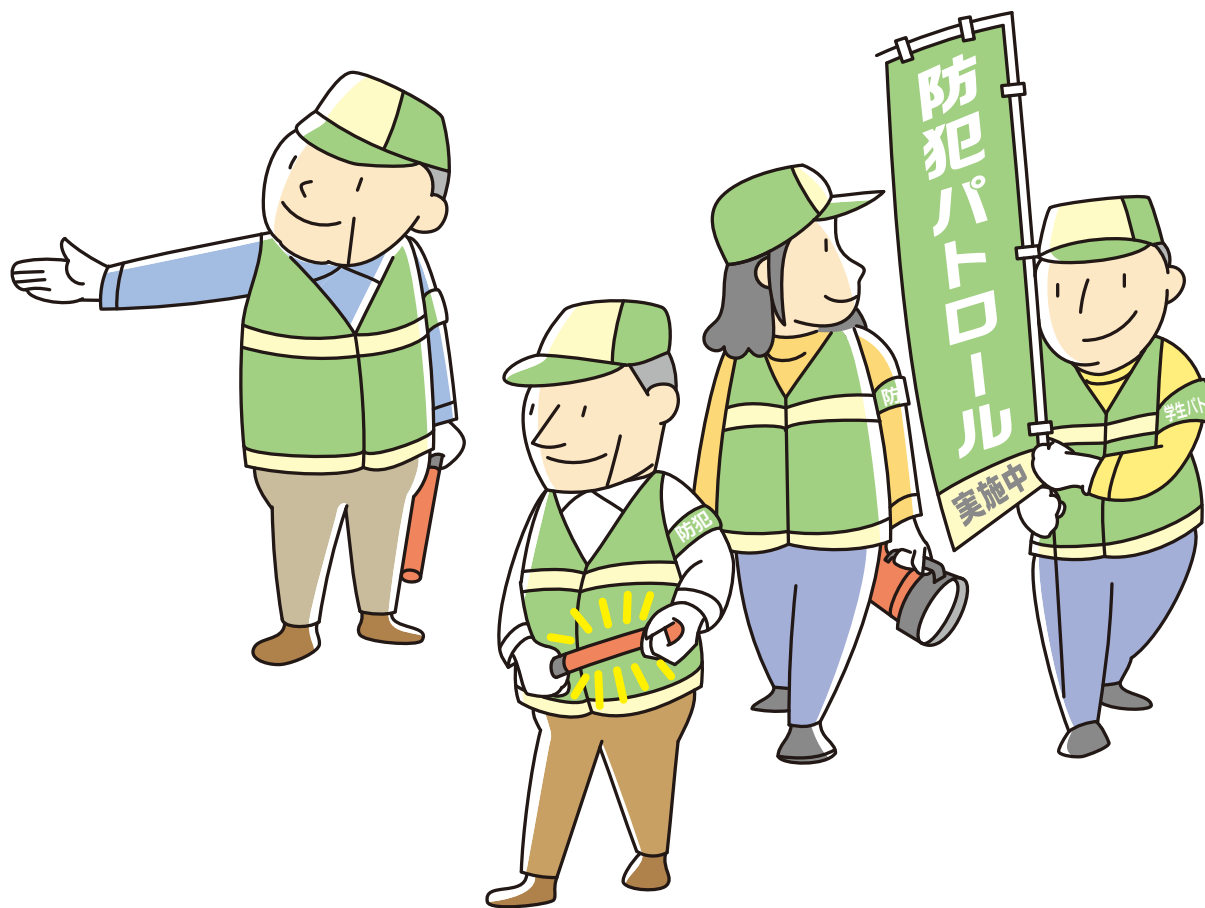


とやま 防犯パトロールの手引き

～「日本一安全・安心な県」を目指して～



富山県 / 富山県警察 / (公財) 富山県防犯協会

令和4年3月

はじめに

防犯ボランティア団体の皆さんへ

富山県の刑法犯認知件数は、平成13年をピークに減少傾向にあります。これは、地域で防犯活動に取り組んでおられる皆様のご協力の賜であり、改めて深く感謝申し上げます。

しかしながら、自転車盗や侵入盗などの窃盗や、特殊詐欺のほか、凶悪犯罪に発展するおそれのある子どもや女性に対する声掛け・つきまとい事案など、身近に起こる犯罪は断続的に発生しており、「地域の安全は地域で守る」ための皆さんの活動は、とても大きな力となります。

現在、県内各地でパトロール隊の高齢化や担い手不足が大きく問題となっています。そこで、本県では、“犯罪の起きやすい場所”に着目する「犯罪機会論」に基づき、少ない人数でも効率的に活動できる「ホットスポット・パトロール」を推奨しております。

この手引きは、その理論の提唱者である立正大学の小宮信夫教授のご指導のもと、より実践的な活動方法を紹介しており、今後のパトロール活動に役立つものと思っております。

犯罪のない、安全で安心して暮らせる社会の実現のために全力を尽くしてまいりたいと考えておりますので、皆様の一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

目次

第1 基本編

- 1 防犯活動の目的…………… 3
- 2 防犯パトロールの基本的な心構え…………… 3
- 3 防犯団体の立ち上げ方…………… 4
- 4 防犯パトロールの携行品…………… 5
- 5 パトロールの基本的な注意事項…………… 6～8
- 6 青色防犯パトロールについて…………… 9～10

第2 実践編

- 1 不審者の発見は、ほぼ不可能に近い!!…………… 11
- 2 人ではなく、「場所」に注目しましょう。…………… 11
- 3 ホットスポットとは?…………… 12～17
- 4 ホットスポット・パトロールのすすめ… 18～19
- 5 ホットスポット・パトロールのやり方… 20～21
- 6 小宮教授より…………… 22～25

第3 役立つ情報編

第1 「基本編」

1 防犯活動の目的

- 地域の犯罪抑止効果を高めること
- 地域住民の安全に対する関心を高めること
- 地域住民の結び付きを高めること

2 防犯パトロールの基本的な心構え

3 K を意識しましょう！

● 気楽に！

気負わず、普段の生活の一部として気楽に行いましょう。

● 気長に！

防犯活動は短期間で効果が出るものではなく、長く続けるからこそ実を結びます。気長に継続して実施しましょう。

● 危険なく！

無理な追跡や単独パトロールなど、危険なことをする必要はありません。犯人を捕まえることが目的ではないことを忘れず、安全に実施しましょう。

3 防犯団体の立ち上げ方

- **メンバーを募る**

自治会、PTA、老人クラブ、商店街など、地域に居住する人や防犯に関心がある人で、パトロールに参加できる人を募集しましょう。



- **グループ名やリーダーを決める**

パトロールを効果的に実施するため、グループ名や責任者を決めましょう。

- **パトロール方法を決める**

リーダーを中心に、どのような方法（曜日や時間帯、区域など）でパトロールを行うか話し合っ決めてみましょう。

- **活動資金の確保**

富山県では、地区安全なまちづくり推進センターを対象とし、防犯活動費に対して「地区安全なまちづくり推進センター活性化補助金」を交付しています。詳しくは県民生活課くらし安全班（076-444-4581）までお問合せください。

そのほか、自治体等で支援制度がないか確認してみましょう。

4 防犯パトロールの携行品

① ユニフォーム、腕章、帽子等

蛍光色などの目立つ服装でパトロールをしましょう。



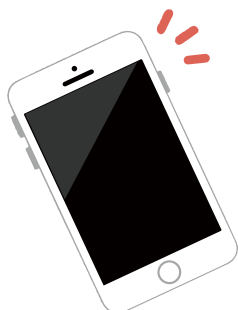
② 懐中電灯、反射材

夜間の活動効果高めるとともに、交通事故防止にも役立ちます。



③ 携帯電話、スマートフォン

メンバー内での連絡や緊急時の通報に役立ちます。



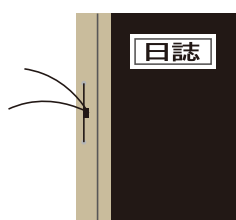
④ 手袋、ゴミ袋

ゴミ拾い等の環境浄化活動を行うとともに、犯罪者に防犯意識の高い町内であることを知らせます。



⑤ パトロール日誌

注意する場所などを次の人へ引き継げるように日誌を作成しましょう。メモ帳としても使用できます。



その他あると便利なもの

カメラ、ハンドマイク、ホイッスル、防犯ブザー



5 パトロールの基本的な注意事項

● 地域の皆さんにパトロールすることを伝えましょう

地域の皆さんの協力を求めるために、回覧板などを利用して、どのようにパトロールするか知らせましょう。また、警察署（交番、駐在所）にも知らせてください。



● 警察に気軽に相談しましょう

パトロールの注意点や危険な箇所など、わからないことがあれば気軽に警察署（交番・駐在所）に相談しましょう。



● 地域の犯罪発生情報を確認しましょう

警察署（交番・駐在所）が発信する犯罪発生情報等を参考にしましょう。

※ P26 「富山県警察安全情報ネット」参照

● 町内会やPTA、消防団等と連携しましょう

● ボランティア保険の加入

十分に注意していても、思わぬ事故等に遭遇し、負傷することもあります。ぜひボランティア保険への加入を検討してください。

※ P26 「防犯グッズ、ボランティア保険」参照

● パトロールは必ず複数で！

危険防止の観点から、必ず複数でパトロールしましょう。
(可能であれば3人以上が望ましいです！！)



参加者同士で情報交換しながらパトロールすることは活動の継続にも繋がります。

● なるべく目立つ格好で！

パトロールしていることが分かるように蛍光色のユニフォームや帽子を着用しましょう。

● 積極的に声かけを！

地域の住民があいさつし合うことにより、連帯感が強まります。また、犯罪者は声をかけられるのを嫌います。



● プライバシーを守りましょう

パトロール中に知り得た他人のプライバシーは、他言することなく秘密を守りましょう。

● 私有地での活動について

トラブルを回避するため、私有地等へ立寄る際には、管理者等の承諾を得た後に行いましょう。

パトロールは安全第一！

～危険なことはせずに、早めに通報を～

犯罪者と遭遇した場合

- ①警察に110番通報する
- ②大きな声や警笛（ホイッスル）、ブザーなどで周囲に知らせる
- ③相手に反撃されないよう十分な距離をとる
- ④近所の家に駆け込むなどして、相手から遠ざかる

こちらが複数でも、不用意に相手を取り押さえようとしな
い！

交通事故を目撃した場合

- ①警察に110番通報する
- ②けが人がいる場合には、けが人の救護を最優先
- ③すみやかに消防（119番）や警察（110番）に通報

交通事故の処理中に、事故当
事者や救護にあたった人が二
次的な事故に巻き込まれる
ケースがあるため、安全確保
に十分注意しましょう。

110番通報 のポイント

一般電話、公衆電話、携帯電話のいずれからでも局番なしで「110」を押すことにより警察につながります。

通報を受けた警察官は、次のような点について順を追って聞きますので、落ち着いて話してください。

- 事件ですか、事故ですか？
- いつありましたか？
- どこで事件等がありましたか？
（目標物などがあれば教えてください）
- 犯人はどんな人ですか？
（性別・人相・服装・車両・逃走方向）
- 被害状況や目撃情報
- 通報者であるあなたの名前、連絡先



6 青色防犯パトロールについて

● 出発前の準備

車の屋根には、回転式のランプを1つだけ取り付けてください。

車体には、団体の名前と、自主防犯パトロール中であることを表示してください。

車の後方に、標章を見えるように掲示してください。

パトロール活動中は、パトロール実施者証を携行してください。



● パトロール活動中

・模範運転を心がけましょう。

常に周りから自分の運転を見られていますので、他のドライバーの模範となる運転を心がけ、交通違反をしないようにしましょう。

パトロール中であっても、ドライバーは運転への集中をお願いします。

・「だろろう運転」はやめましょう。

「相手が止まってくれるだろろう」「飛び出してこないだろろう」といった「だろろう運転」はやめましょう。

「相手が自分の車に気づいていないかも知れない」「優先させてくれないかも知れない」といった「かもしれない運転」をお願いします。

・運転中の携帯電話はやめましょう。

警察への110番通報や、団体の間で連絡が必要な場合は、電話は同乗者に任せるか、確実に車を停めてから電話しましょう。



- ・ **交通事故の防止に努めてください。**

交差点は一番事故の多い場所です。

見えにくい所では、徐行や一時停止を確実にを行い、同乗者と連携して安全を確認しましょう。

また、横断歩道では、歩行者や自転車を優先してください。

- **点灯時**

決められた場所以外の区域では、青色回転灯を点灯させたパトロールはできません。

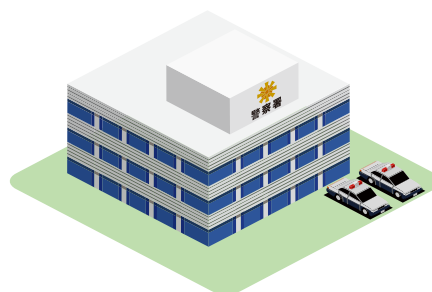
交通事故を目撃したり、犯罪被害の届け出を受けたときは、すぐに110番通報し、交通ルールを無視したり、車を追跡するなどの危険な行為はやめてください。



- **その他**

パトロールを実施するには、書類での申請が必要です。

申請の方法については、最寄りの警察署の生活安全課にご相談ください。



第2 「実践編」

1 不審者の発見は、ほぼ不可能に近い!!

「不審者」 = 「犯罪を企てている人」とした場合、
「犯罪を企てている人」の見分けは、ほぼ不可能に近い。



「こんなわかりやすい不審者は、普通はいません」 建物への侵入盗などでも、プロの犯罪者は、スーツを着たり、訪問販売員や営業マンを装ったりします。ありふれた姿の方が、住民や通行人の記憶に残りにくいからです。

防犯パトロールは、とかく「不審者」の発見を目標にしがちですが、犯罪者は、**犯罪を始める瞬間を見られない「場所」**を選びます。つまり、「不審者」の発見は「ほぼ不可能に近い」のです。

2 人ではなく、「場所」に注目しましょう。

犯罪機会論とは？



小宮先生

犯罪は「動機」があっても、「機会」(チャンス)がなければ実行されません。「場所」に注目する考え方です。

犯罪の動機があっても、それだけで犯罪は起こらない。犯罪企図者が、犯罪の機会に出会ったときに、初めて犯罪は起こる。「チャンスがあるから犯罪が起こる。」
「機会なければ、犯罪なし」 = 「犯罪機会論」

3 ホットスポットとは？ (ホットスポットの理解が大切)

「ホットスポット」とは、「犯罪が起こりやすい危険な場所」



「入りやすく」 + 「見えにくい」 場所

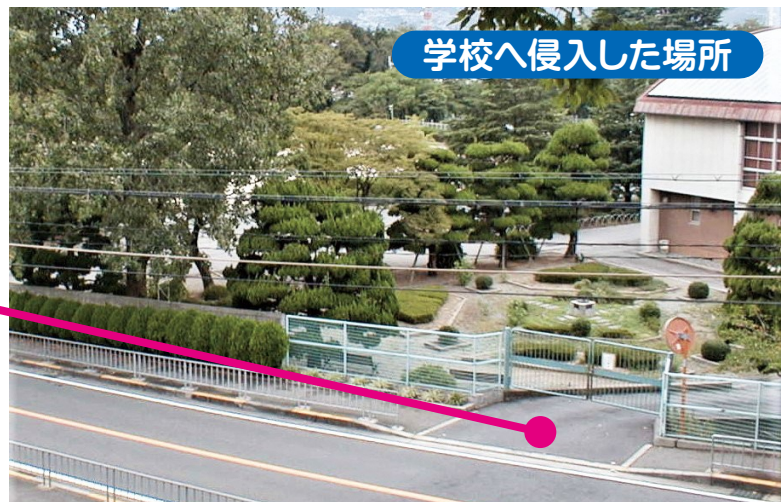


キーワードは **「入りやすく」 + 「見えにくい」**

ホットスポットを理解するには、こういった場所が、「入りやすく」、「見えにくい」なのかを正しく理解することが大切。決して難しくありません。

物理的に「入りやすい」場所

小学校の門が開放状態
(物理的に入りやすい)



児童の連れ去り場所



車道と歩道の「植込み」
がない場所で、児童に
声掛け
(物理的に入りやすい)

「見えにくい」場所の4パターン

物理的に見えにくい場所

心理的に見えにくい場所

①死角で見えない場所

カベや塀、柱、植込みなどで、物理的に見えない

②誰にも見てもらえない場所

死角はないが、周囲に建物がなく、視線がない

①無関心な場所（秩序感の乏しい場所）

落書きやゴミの不法投棄が放置された場所

②不特定多数の人が集まる場所

人が多いと、注意力が散漫になる



「見えにくい」場所には、4つのパターンがあります。これから、過去の事件発生現場の画像で、解説します。

物理的に見えにくい場所①

児童の連れ去り場所



死角がある

児童の連れ込み場所



上は、保育所の玄関前、カベや柱に囲まれて死角。右のトイレは、カベにより死角ができており、買い物客や従業員から見えない。(物理的に見えにくい場所)

物理的に見えにくい場所②



生徒の連れ去り場所

死角はないが、
視線がない



児童の連れ去り場所

見晴らしはいいが、周りには
家がないことから、誰からも
見てもらえない場所、
つまり視線が期待できない。
(物理的に見えにくい場所)

心理的に見えにくい場所①



事件が発生した場所近辺

無関心な場所
(秩序感が薄い)



事件が発生した場所近辺

落書きや、冷蔵庫などのゴミ
の不法投棄の放置は、犯罪者
に住民の無関心を連想させ、
犯罪を誘発する。
(心理的に見えにくい場所)

心理的に見えにくい場所②

不特定多数の
人が集まる場所



多数の人が集まる場所は、
人の注意や関心が分散する
その結果、犯罪者の行動が見過
されてしまう。
犯罪者にとっては、捕まりにくい
場所と思わせる。
(心理的に見えにくい場所)



人が大勢いる場所
は、誰かが見てい
ると思いがちだが、
実は「誰も見てい
ない」
(心理的に見えにく
い場所)

ホットスポットの具体例 通称「トンネル構造」

ホットスポット



ブロック塀が視線を遮る

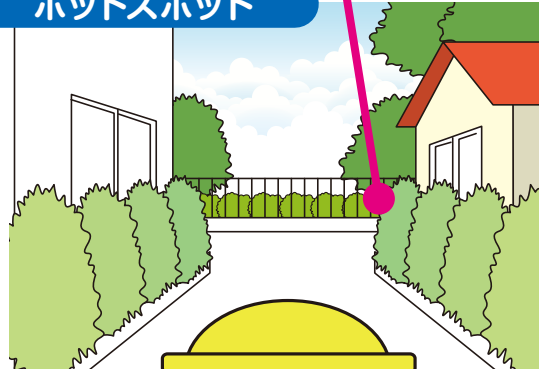
「窓」から見えやすい



フェンスが低い、視線が期待できる

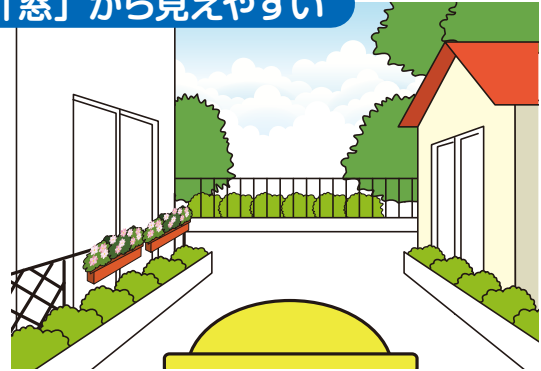
両サイドの「窓から見えにくい」場所 = 通称「トンネル構造」

ホットスポット



生け垣が高い、視線を遮る

「窓」から見えやすい



生け垣が低い、視線が期待できる



キーワードは「入りやすく」、「見えにくい」
皆さんの「街」のホットスポットを探してみましょ。必ずあります。

ホットスポットの具体例 物理的に見えにくい場所

ホットスポット



「視線」が期待できない

周りに「窓」が多い



「視線」が期待できる

◆割れ窓理論とは？

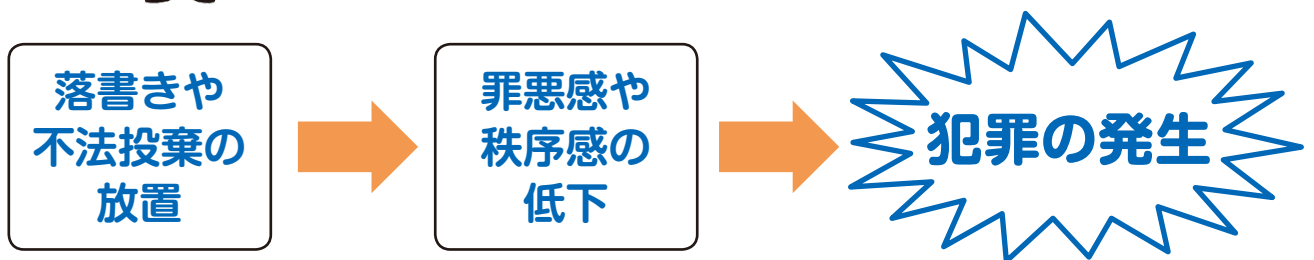
割れ窓理論とは、軽微な犯罪でも軽視せず、きめ細かく対処することで、重大な犯罪を抑制できるとする考え方です。

「建物の窓が壊れているのを放置すると、誰も注意を払っていないという証になり、やがて他の窓もまもなくすべて壊される」との考え方からこの名が付けられています。

1982年（昭和57年）に、アメリカの犯罪学者のジョージ・ケリングが発表しました。



「割れ窓理論」による
「悪のスパイラル」を解説しよう。



小さな悪



大きな悪



「小さな悪」の放置は、人々が罪悪感を抱きにくくなり、他方では、不安（無秩序感）の増大から、街頭での人々の防犯活動が衰える。そのため、「小さな悪」がはびこる。そうになると、犯罪が成功しそうな雰囲気醸し出され、「凶悪犯」という「大きな悪」が生まれてしまう。

4 ホットスポット・パトロールのすすめ



ホットスポット・パトロールは、「犯罪機会論」をパトロールに応用したものです。アメリカで、長年の実証実験により、効果が高いことが証明済みです。

全国的に防犯ボランティアが減少する中で、ホットスポットを「選択」し、「集中」してパトロールすることにより少ない人数・時間で、効率的かつ効果的な「唯一の手法」です。

犯罪防止の3要素

		犯罪防止の3要素	
犯行場面		物理的な要素（ハード面）	心理的な要素（ソフト面）
標的	抵抗性 犯罪者から加わる力を押し返す性質	恒常性 一定していて変化しない状態 例：ロック、マーキング、強化ガラス、防犯ブザー、非常ベル	管理意識 望ましい状態を維持しようという意志 例：リスクマインド、指差し確認、整理整頓、健康管理、情報収集
標的の周辺	領域性 犯罪者の力が及ばない範囲をはっきりさせる性質	区画性 境界を設けて他から区別されている状態 例：ガードレール、フェンス、ゲート、ゾーニング	縄張り意識 犯罪者の侵入を許さないという意志 例：パトロール、民間交番、防犯看板、受付記帳、パスポート
	監視性 犯罪者の行動を見張り、犯行対象を見守る性質	視認性 周囲からの視線が犯罪者に届く状態 例：ガラス張り、植栽管理、カメラ、ライト、ミラー	当事者意識 主体的にかかわろうという意志 例：清掃活動、あいさつ運動、一戸一灯運動、花壇づくり運動、ボランティア活動



ホットスポット・パトロールは、ホットスポット（入りやすく見えにくい場所）を重点的に回るパトロールです。
（防犯効果が実証された唯一の方法）

ホットスポット・パトロールと対比されるランダム・パトロールの防犯効果は、海外では否定されています。

ローレンス・シャーマン「エビデンスに基づく犯罪予防」



犯罪者がランダム・パトロールを恐れない理由

ランダム・パトロールは、ルートを固定しないで、毎回ランダムにルート設定して、パトロールする方法です。

捕まった空き巣犯人が、犯行をあきらめた理由のトップが、「近所の人に声をかけられたり、ジロジロ見られたりしたこと」と語ったことが理由と考えられます。

この話が、「犯行前に住民に顔を見られたと思ったら、しばらくその場所に近づかないのが普通だ」となり、さらにこの考え方が、「パトロールで下見中の空き巣犯と遭遇さえすれば、犯行は防げるはずだ」という考え方になって広まったと考えられます。

ところが、空き巣の大半は捕まっていません。犯罪者の中には、顔を見られたくらいでは、犯行を断念しない者も多くいます。例えば、インターホンを押して、家人の不在を確認している者もいます。侵入先を物色している段階では、まだ罪を犯しておらず、捕まる危険性がないからです。

いざ侵入するときには絶対に目撃されない、そういう家を選ぼうと考え、そのために下見をしているのです。

だから、犯罪者はランダム・パトロールを恐れないのです。

5 ホットスポット・パトロールのやり方

パトロールエリアの中で、気になる場所があれば、

↓
周りの景色を見て、

↓
判断する

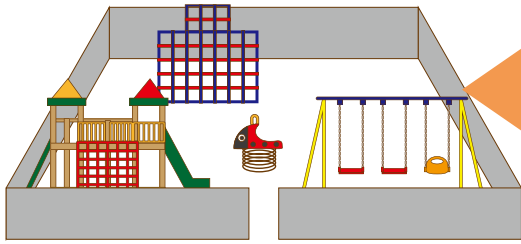
判断材料は、
周囲の「建物の向き」や「窓の数」
「塀」や「生け垣」の高さ、フェンスが
目隠しか否か、落書き、ゴミの不法投棄、
空き家の有無など

入りやすく、見えにくい場所

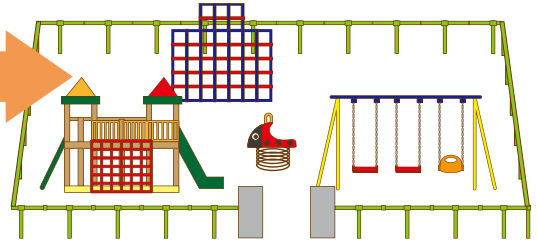
⇒ 犯罪が起こりやすい

入りにくく、見えやすい場所

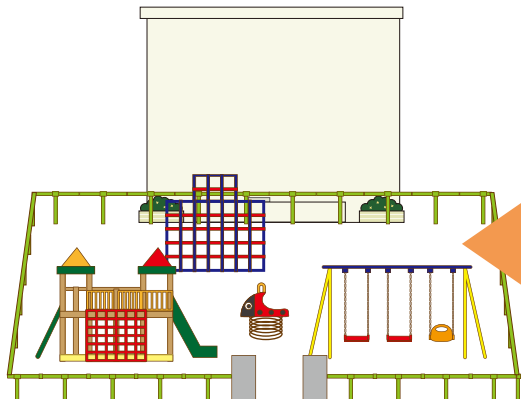
⇒ 犯罪が起こりにくい



コンクリート塀で公園内が見えにくい



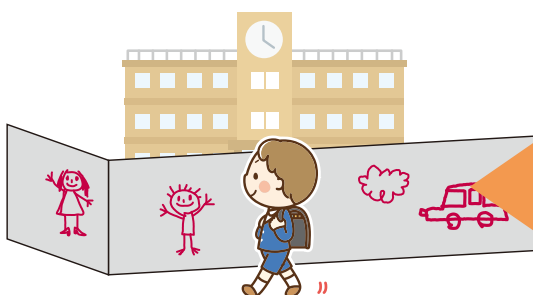
見通しの良いフェンスで公園内が見えやすい



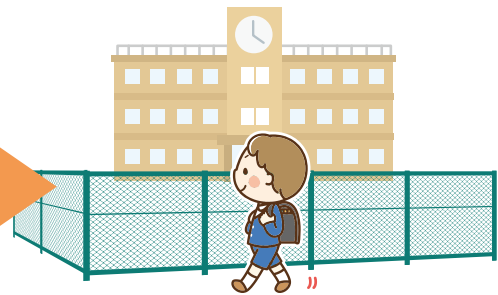
マンションの住民から見えにくい



マンションの住民から見えやすい



落書きやゴミが放置された通学路



ゴミのない金網フェンス沿いの通学路

ホットスポットに立ち寄ったら（またはホットスポットを見つけたら）、



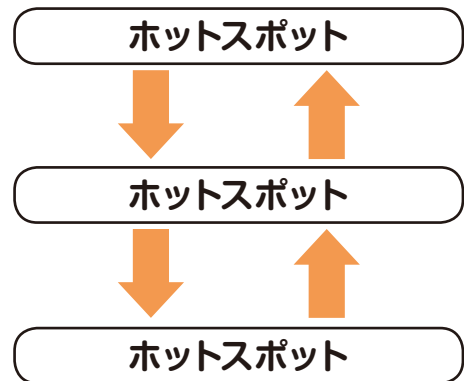
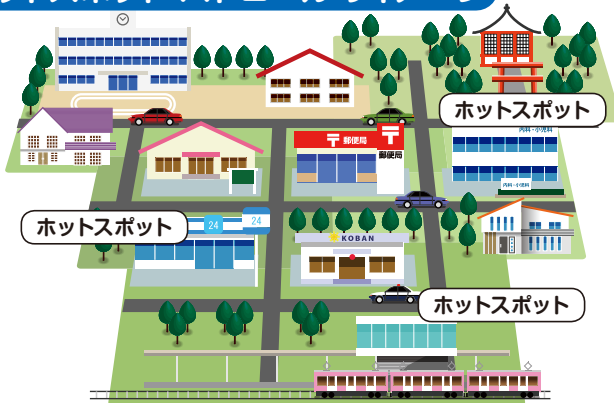
5～10分程度を目安に留まり、周囲を見回るとともに、
通行人がいれば、挨拶を行うなど存在感を示します。



- ※1 青パトの場合は降車し、見回りを行います。
- ※2 ホットスポットの広さに応じて、滞在時間を考えましょう。
(広めの場所は滞在時間を長くする等)

ホットスポットで自分たちの存在を「見せる」ことを意識してください。

ホットスポット・パトロールのイメージ



ホットスポットを見つけた場合、パトロール活動により
警戒するだけでなく、犯罪が起こりにくい場所へ
改善できないかを、皆さんで話し合うことも大切です。

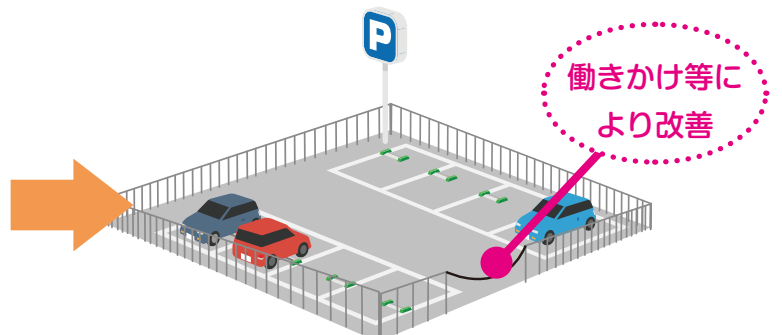
改善例

出入口が開放されている駐車場



駐車場に入りやすい！

出入口にチェーンが張られている駐車場



勝手に入ることが難しい
→そもそも子どもも中に入るのをためらう
→連れ去り現場になる可能性は低い

6 小宮教授より

科学的な防犯ボランティア活動のススメ： 捕まりたくない犯罪者と死もいとわない犯罪者

立正大学教授・社会学博士 小宮 信夫

犯行形態に応じた対策を

令和元年5月に川崎市で私立カリタス小学校の児童らが襲われ20人が死傷し、6月に大阪府吹田市で交番勤務の警察官が襲われて拳銃を奪われ、7月に京都アニメーションのスタジオが放火され36人の死者を出した。こうした「自爆テロ型」の凶行は平成30年6月にも起こっており、富山市では交番勤務の警察官が刺殺され、奪われた拳銃で小学校の正門付近にいた警備員が射殺された。

こうした事件が続くと、防犯ボランティアは無力感にさいなまれることになるだろう。しかし、あきらめる前にやるべきことがある。それは冷静に事件を分析し、防げる犯罪は確実に防ぐ、ということだ。

まずは、犯罪の種類を整理することから始めよう。誘拐や空き巣といった通常の犯罪であれば、ほとんどの犯罪者は「捕まりたくない」と思っている。これに対し、自爆テロ型の犯罪者は「死んでもいい」と思っている。ここに決定的な違いがある。

通常の犯罪の場合、「捕まりたくない」と思っている意識が、犯罪者の最大の弱点になる。なぜなら、彼らは捕まりそうにない場所でしか犯行に及ばないからだ。欧米での長年の研究から、捕まりそうにないと犯罪者が思う場所は、「入りやすく見えにくい場所」だということが既に分かっている。こうした視点は「犯罪機会論」と呼ばれ、これを教育に応用したものが「地域安全マップ」であり、パトロールに応用したものが「ホットスポット・パトロール」だ。

残念ながら、世界標準である「犯罪機会論」の日本における認知度は低く、地域安全マップとホットスポット・パトロールの普及率は1割にも達していない。しかし、やり方ははっきりしているので、あとはこの手法を広めていけば、通常の犯罪は防げる。

恐怖は思考を停止させる

ところが、「死んでもいい」と思っている自爆テロ型の犯罪者には、地域安全マップやホットスポット・パトロールは通用しない。「捕まりたくない」とは思っていないからだ。

「走って逃げる」という提案もあるが、もってのほかで話にならない。恐怖は体を硬直させることが心理学の実験で分かっているからだ。例えば、ニューヨーク大学のジョセフ・ルドゥー教授は、「恐怖は思考よりも早く条件反射的に起こる」と主張している。

実際に、千葉県松戸市の路上で下校途中の女儿が刃物で切りつけられた事件（2011年）でも、刃物を持った男が近づいてきたので逃げようとしたが、足がもつれて転んでしまい刺された。やはり、恐怖を感じる場面では、走って逃げることも、大声で助けを求めることも、防犯ブザーを鳴らすこともできない、と思った方がいい。

「防犯ボランティアによる見守りを強化すべき」という提案も、危険極まりない。これを主張する人は、川崎殺傷事件で使われた刃渡り30センチの柳刃包丁を一度見た方がいい。見るだけでも身の毛がよだつに違いない。ボランティア頼みは、「恐ろしいから活動をやめたい」というボランティアを増やすだけだ。

川崎殺傷事件と同じ日、さいたま市の路上で、刃物を振り回していた男に警察官が発砲し、被害を防いだ事件があった。このように、自爆テロ型の凶行については、拳銃を携帯している警察官にしか阻止できないと言わざるを得ない。

最先端テクノロジーに期待

問題は、いかにして、犯人がターゲットにたどり着く前に、警察官が現場に駆けつけられるかだ。この目的のために開発されたものに、「ディフェンダーX」というソフトウェアがある。顔の皮膚に現れる微振動から、人の興奮度や緊張度を測定する技術であり、これを設置済みの防犯カメラに搭載すれば、凶器を隠し持っている人を画像処理で検知して警察に自動通報できる、というわけだ。

例えば、川崎殺傷事件でも、犯人が利用した駅の防犯カメラにディフェンダーXが入っていれば、犯人が凶器を携えて児童に近づく前に、自動通報を受けて駆けつけた警察官により制圧された可能性がある。相模原市の知的障害者施設で入所者19人が殺害された事件（2016年）や、前述した交番襲撃事件でも、施設や交番の防犯カメラにディフェンダーXが入っていれば、犯行前に対処できた可能性がある。

もちろん、ディフェンダーXが激しい興奮状態にある人を検知しても、なぜ興奮しているのかまでは、このソフトでは分からない。そのため、検知した人を「犯罪予備軍」とみなすのは早計であり、あくまでも、今ここで助けが必要な「声かけ対象者」と位置づける必要がある。

残念ながら、防犯カメラが設置されているだけでは、自爆テロ型の犯罪者を止めることはできない。「死んでもいい」と思っている犯罪者は、防犯カメラに録画されるかどうかなど気にしないからだ。真の意味で「防犯」のためのカメラにするためには、「犯罪企図者」の検出を可能にするソフトの導入が不可欠なのである。

犯罪機会論の三本柱

こうした自爆テロ型の犯罪者とは対照的に、「通常型」の犯罪者は、「捕まりたくない」と思っている。もちろん、「死ぬこと」など思いもよらない。そのため、この種の犯罪者は、捕まりそうにない場所ではしか犯行に及ばない。したがって、そこがどこだか分かれば、十分な対策を講じることができるはずだ。

犯罪学では、「捕まりそうにない雰囲気」を「犯罪の機会（チャンス）」とみなし、その特徴を探ってきた。その結果、犯行に及ぶ場所には、（だれもが）「入りやすい場所」と（犯行が）「見えにくい場所」という二つの条件があることが分かった。

とすれば、「入りやすく見えにくい場所」を「入りにくく見えやすい場所」に改善すれば安全性が高まることになる。デザインやレイアウトを工夫して、犯罪の機会を減らすアプローチは、「防犯環境設計」と呼ばれている。前述した「地域安全マップ」は、「入りやすく見えにくい場所」と「入りにくく見えやすい場所」を見分ける「景色解読力」を子どもの身につけさせるのを目的にした教育手法であり、「ホットスポット・パトロール」は、「入りやすく見えにくい場所（ホットスポット）」を重点的に警戒するパトロール手法なのである。

このように、「犯罪機会論」においては、防犯環境設計、地域安全マップ、ホットスポット・パトロールが三本柱になっている。このうち、防犯ボランティア活動の中心になるのが、ホットスポット・パトロールだ。

狙い撃ちのパトロール

パトロールと言えば、ルートを固定せず、漫然と行う「ランダム・パトロール」を指すのが一般的である。いつどこにパトロール隊が現れるのかが分からなければ、至るところにパトロール隊がいるような錯覚が生まれるというわけだ。しかし、パトロール隊が下見中の泥棒とバッタリ会ったとしても、犯行を始めてはいないのだから、現行犯逮捕や110番通報をすることはできない。さらに、泥棒は侵入するドアや窓が道路からは見えにくい家を選ぶので、道路を行ったり来たりするだけでは、空き巣を始める瞬間の泥棒を発見することはできない。

こうした理由から、海外ではランダム・パトロールは人気がない。それに代わって登場したのが、犯罪が起こる確率の高い地点を重点的に回るホットスポット・パトロールだ。ジョージ・メイソン大学のクリストファー・コーパー准教授によると、ホットスポットでは、しばらくとどまり、犯罪者にプレッシャーをかけるのが良いという。

例えば、プロの空き巣グループは、車を使ってターゲット地区に入り、まず作戦本部を決めてそこに駐車し（ここがホットスポット）、その後に徒歩で物色を開始すると言われている。空き巣グループにとって、物色中にパトロール隊と遭遇することは想定内であり、まだ犯罪を始めていないので捕まることはないと思っている。しかし、パトロール隊に空き巣グループの作戦本部（ホットスポット）に滞留されたら、彼らはどう思うだろうか。道路上で偶然会うのとはわけが違う。これから行おうとしている空き巣を、事前に知っているかのようなパトロール隊の行動だ。空き巣グループが受けるショックは計り知れない。当然、リスクを回避するため、その地区での犯行をあきらめ、別の地区へと移動するはずだ。

持続可能なパトロール

「証拠に基づく犯罪対策」を提唱するケンブリッジ大学のローレンス・シャーマン教授も、「犯罪が起こりやすい場所にパトロールを集中させることの有効性については、一貫して強固な科学的裏付けがある」と述べている。

ボランティアによるパトロールと言うと、とかく不審者の発見を目的にしがちだが、それでは意味がない。犯罪を始める瞬間を見られる犯罪者は、相当にレベルの低い犯罪者だけだ。普通は、犯罪を始める瞬間を見られない場所を選んでくる。つまり、不審者の発見は不可能なのだ。

しかし、ホットスポット・パトロールであれば、限られた時間と人員でも、「選択と集中」を通して、効率的で効果的な防犯活動ができる。ボランティアの高齢化や活動のマンネリ化が問題視されている以上、単調なランダム・パトロールから、知的刺激に満ち、最小の労力で最大の効果を上げるホットスポット・パトロールに切り替えるべきではないだろうか。ホットスポット・パトロールは、犯罪学の知見が盛り込まれた、実に奥の深いパトロールだ。そして奥の深いパトロールであればあるほど、防犯効果も大きくなり、無理なく長く続けることができるのである。



シカゴ市警察のホットスポット・パトロールに同行したときの筆者

第3 「役立つ情報編」

● 富山県警察「安全情報ネット」

県警では「子ども・女性の安全にかかわる情報」「犯罪発生（検挙）情報」「その他（危険動物出没等）情報」等の身近な地域安全情報をメールで配信しています。ぜひご登録ください。

登録用

URL <https://service.sugumail.com/toyama-police/member>



● 防犯グッズ、ボランティア保険

腕章やクラックボールなどの防犯グッズを（公財）富山県防犯協会であっせんしています。また、ボランティア保険については各地区防犯協会にご相談ください。

● 防犯サポーターによる講習

（公財）富山県防犯協会では、防犯ボランティア団体等の要請により、防犯サポーターが各種講習会等に出向き、防犯講習を実施しています。詳しくは当協会のホームページを参照してください。

URL <http://www.t-kenbou.server-shared.com/>

● 最新の防犯情報

富山県警察ホームページでは、不審者情報や主な街頭犯罪を地図で確認できる「犯罪発生状況マップ」や地域の防犯情報等を確認できます。

URL <http://police.pref.toyama.jp/>



富山県安全なまちづくり
マスコット
「セーフティーくん」



富山県警察カギかけヒーロー
KEYレンジャーツーロックV

発行 富山県生活環境文化部 県民生活課 暮らし安全班

編集 富山県／富山県警察／（公財）富山県防犯協会

監修 立正大学文学部社会学科教授・社会学博士 小宮 信夫

問い合わせ 富山県 県民生活課 暮らし安全班

電話：076-444-4581

FAX：076-444-3477

e-mail：akenminseikatsu@pref.toyama.lg.jp



元気とやまマスコット「きとと君」
© 富山県